

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520644

研究課題名（和文） 第一次世界大戦初期ハプスブルク帝国の疎外化過程

研究課題名（英文） The Process of Alienating in the Habsburg Monarchy during WWI

研究代表者 大津留 厚 (OTSURU ATSUSHI)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10176943

研究成果の概要（和文）：第一次世界大戦初期のハプスブルク帝国では、一方で総力戦体制に向けて諸政策が取られたが、他方で難民、敵性自国民、捕虜兵など総力戦体制から排除された人々を抱え込むことになった。

研究成果の概要（英文）：At the beginning of the first World War the Habsburg Monarchy was forced to take administrative measures to consolidate multinational society. At the same time war refugees, suspicious people and POWs were alienated from society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：西洋史

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：第一次世界大戦、捕虜、収容所、オーストリア＝ハンガリー、ハプスブルク、青野原 総力戦

1. 研究開始当初の背景

(1)ハプスブルク帝国の崩壊過程でチェコ軍団など捕虜兵が果たした役割はこれまでも注目されてきたが、ハプスブルク側が捕虜にした兵士も含めて総合的に研究したものはこれまでなかった。

(2)本研究のヒントになったのは、神戸大学人文学研究科が阪神淡路大震災以降取り組んできた地域の歴史遺産の活用の中で明らかになった青野原の捕虜収容所の存在だった。そこに収容されていたハプスブルク軍の捕虜兵のうち、イタリア系の捕虜兵が、イタリアの協商側での参戦以降ほかの捕虜兵から疎外されるという事実が明らかになった。

2. 研究の目的

(1)ハプスブルク帝国の崩壊過程は、主に民族運動などの遠心力が政府の求心力を上回ったことにあるとされてきた。しかし青野原捕虜収容所に見られるように、総力戦体制が作られていく半面、そこから排除（疎外）される人々がでてくることになる。本研究は難民、捕虜、敵性自国民、敵国民など総力戦体制から排除された人々からハプスブルク帝国を見直すことを目的とした。

(2)本研究の原点となった青野原捕虜収容所の存在はこれまでハプスブルク史研究の中では全く顧みられていなかったが、そこでは

ミニチュアのハプスブルク帝国が再現されていた。そのことをオーストリアの研究者とともに考えていくことを目指して、オーストリア国家文書館で展示会を開くなどの活動を行う。

3. 研究の方法

(1)国際的に見たときに第一次世界大戦研究は、「勝者」「敗者」の歴史から、共通の体験としての戦争へと大きく転換している。その中で最大で900万人に達する捕虜の研究は緒に就いたばかりと言える。その中で未発掘の史料を渉猟していくことがまず求められた。オーストリア・シュタイアーマルク州、チェコ、ハンガリーなどで史料収集に当たった。

(2)研究成果を国際社会に提示しながら研究を進めるためウィーンや東京で展示会を開いた。

4. 研究成果

(1)ハプスブルク帝国崩壊論への新たな視座。第一次世界大戦当時、現在の兵庫県小野市、加西市にまたがる青野原には捕虜(俘虜)収容所があり、500名近くのオーストリア＝ハンガリー兵、ドイツ兵が4年4ヶ月にわたり生活していた。中国の青島を含む膠州湾地方は1898年以来ドイツの租借地だったが、第一次世界大戦が始まると日本軍はここを攻撃、占領した。その時捕虜になったオーストリア＝ハンガリー兵、ドイツ兵は日本各地に設置された捕虜収容所に収容された。青野原に収容されたのはその一部であった。また青野原に収容された捕虜兵たちは、見方を変えれば、第一次世界大戦で捕虜になった各国捕虜兵の一部に過ぎない。特に緒戦でロシア軍に大敗北を喫したオーストリア＝ハンガリーは1914年だけをとっても200万人ほどの捕虜兵を出していた。その多くはロシアの捕虜として、ヨーロッパ・ロシアからシベリアに点々と作られた収容所に収容されていた。そして1915年になるとドイツ、オーストリア＝ハンガリー軍の反攻にさらされたロシアも大量の捕虜を出すことになった。彼らは今度はオーストリア＝ハンガリー国内各地に設置された収容所に収容された。ユーラシア大陸はさながら捕虜収容所群島の様相を呈したが、しかし収容所は捕虜に限られたことではなかった。戦場になった地域の民間人は戦火を逃れて難民化し、国家はその救済に迫られ、難民収容所を設置することを余儀なくされた。また開戦は予想されていなかったため、どの陣営も国内に敵国民間人を抱え、その処遇を問われていた。民間人の交換が予想されたが、実現は難しく、実際には彼らもまた長期的に収容所に収容されることになった。さらに、総力戦を強いられた

国家は当初から国家に反抗的な人物を敵性国民として収容所に隔離することになった。第一次世界大戦は総力戦として語られる。戦争が長期化し、大量の物資が戦場で消耗されると、兵士や労働力として国民が動員され、国民生活が統制されるようになった。全ての国民が戦争にかかわらざるを得なかったということでは、確かに第一次世界大戦は総力戦であった。しかし、他方で総力戦体制から「排除」された大量の人びとが収容所に収容されていたことも忘れてはならない。そして「排除」されたはずの人びとは、ロシアで革命が起こると様々に蠢動することになる。それはまた「第一次世界大戦」の枠をもはみ出すことになる。本研究では、これまで埋もれていたチェコやハンガリーの収容所に関する史料も発掘し、第一次世界大戦が総力戦への道を歩みながら、そこから排除された人々を多く抱えていたことを明らかにし、「非総力戦論」という概念を創出した。この第一次世界大戦初期の総力戦体制から排除された人びとの存在が、大戦末期にハプスブルク帝国の崩壊を導くことになるという見取り図を得ることができた。その点で注目されるのは青野原俘虜収容所で起きた騒擾試験である。注目されるのが、第一次世界大戦末期の1918年7月に起こった騒擾事件である。

「管下加東郡青野原俘虜収容所ニハ俘虜独逸人約二五〇名奥国人二二〇名ヲ収容シ居レルカ本月十日午後九時三〇分頃同収容所俘虜独逸人ト奥国人トノ間ニ紛擾ヲ醸シ独逸人俘虜ハ奥国人俘虜「バチリウエクストラウ」ホカ二十五名ト格闘シ「バチリウエクストラウ」ノ右手ニ負傷セシメタリ。原因其ノ他ニツキテハ目下尚詳細調査中ナルモ過般奥国内ニ反乱勃発シ中欧同盟側ニ不利ヲ来タシタルハ反乱者コロアツベンニ属スルモノニ起因セリ」と日本側は記録している。このことは第一次世界大戦末期にオーストリア＝ハンガリーで起こった反乱が日本の捕虜収容所まで伝わり、総力戦体制から排除された人びとの間にそれに連動した動きがあったことを示している。今後の研究課題である。

(2)地域から世界史への視座と成果の地域への還元。

現在の兵庫県小野市、加西市にまたがる青野原には第一次世界大戦当時捕虜(俘虜)収容所があり、500近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が捕虜生活を送っていたが、この中には、折から青島に寄港していて、第一次世界大戦の開始とともにドイツ軍に合流したオーストリア・ハンガリーの巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」号の乗組員も含まれていた。したがって、現在で言えばドイツ、オーストリアだけでなく、ポーランド、

チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、クロアチア、スロヴェニア、北イタリアなどの出身者が、「独軍俘虜」として日本の各地で暮らすことになった。青野原収容所の特徴は、これら日本で収容されたオーストリア・ハンガリー兵の約八割が収容されたことにある。青野原俘虜収容所の方針は、大戦が終わるまで捕虜たちを平穏無事に預かることだった。収容所当局が恐れたことは捕虜たちが収容所の生活に不満を持って、脱走や反抗行為を行うことだった。そのため捕虜たちが単調な生活に飽きないようにし、身体面でも精神面でも健康状態を維持させるために娯楽が重視された。室内で行う娯楽としては、将棋(チェス)、カルタ(トランプ)、ビリヤード(台が展示されている)などが好まれ、図書や新聞の閲覧も許された。また音楽や演劇が奨励された。特に音楽に関しては楽隊を編成し、演奏のために小さな音楽堂を建設し、ピアノ、オルガン、バイオリンなどを備え付けた。お菓子や腸詰を作ることも認められており、その成果は工芸展覧会で示された。室外の娯楽で好まれたのはスポーツで、サッカー、テニス、ボクシング、体操などが盛んで、特にサッカーは近隣住民との試合も行われた。そのほか東屋を作ったり、花壇や菜園を作ったり、豚、鶏、鳩、ウサギを飼ったりすることで捕虜たちはストレスを発散すると同時に食生活を豊かにしていた。収容所当局の方針があくまでも平穏無事な捕虜の収容であったため一方で捕虜の生活にはかなり自由が認められていたが、それは他方で不穏な動きには厳しく当たるということを意味していた。朝夕二回、将校、下士官、兵卒全員を決められた場所に集めて整列させ、点呼をとり、時には抜き打ち的に点呼を取ることもあった。それは捕虜の所在を確認すると同時に捕虜たちに常に監視されていることを自覚させるためであった。また職員は常に所内を巡回して捕虜の動静を探り、所持品の検査をし、特に逃亡に役立つものは取り上げて保管する方針を取っていた。また所持金を一人三〇円以内に制限し、軍服以外の平服はすべて収容所が管理した。第一次世界大戦下日本の捕虜収容所を調査した国際赤十字も、収容された捕虜兵が「健康で栄養面でも行き届いている」と見ていたことはその報告書からも明らかである。しかし特に将校たちにとって、若い日本軍将校のぞんざいな態度や、たいした理由もなく収容所当局に呼び出されることは屈辱と感じられていた。青野原俘虜収容所では、監督者に対する暴行事件が二件、自殺が一件報告されているが、概ね収容所当局が望んだように大きな問題もなく収容期間が経過したと言えるだろう。青野原俘虜収容所の調査研究は、1992年、小野市史の編纂を通じて小野市と神戸大学が

連携して調査研究したことから始まった。2005年には、小野市と神戸大学の間で、教育や社会文化に関する連携事業を進める包括協定が結ばれ、調査研究の成果を小野市で公開した。

小野市には、今でも当時の様子を記録した新聞や写真のほか、オーストリア兵たちが行った演奏会や演劇の案内チラシなどの資料、展示即売した作品などが数多く残され、当時の交流の様子を身近に知ることができる。2005年には演奏会のチラシに基づいて、捕虜たちが演奏した曲目を神戸大学交響楽団有志が再現するという試みも行われた。翌2006年には、神戸大学でも展示会、演奏会を開催し、大学内にも地域連携事業の成果が目に見える形で示された。さらにこの科研の一環として、2008年にはこうした成果を、捕虜たちの故国の一つであるオーストリアの国家文書館で展示し、同時に神戸大学交響楽団有志による捕虜の演奏会の再演が国家文書館と軍事史博物館で行われた。

2009年の東京での展示会の開催は、これまでの成果の上に立ちながら、さらなる展開を図ったものである。この展示会は在日オーストリア大使館の全面的協力の下で行われ、国際交流のさらなる発展が見られた。またこれまでの地域史の視点、グローバルな視点に加え、国家史の視点から青野原収容所を捉える契機とするものでもあった。第一次世界大戦当初東京・浅草にあった捕虜の収容施設は後に習志野市に移った。その習志野市の市民グループとの協力関係も築くことができた。本科研の成果を踏まえて、2011年秋には小野市でもう一度演奏会、展示会を開き、小野市民に報告する予定でいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①大津留厚「青野原俘虜収容所の世界—非総力戦論序説」『歴史科学』198号(依頼原稿)、2009、36-47

②大津留厚「オーストリア近現代史という問い」『世界史の研究』216号(依頼原稿)、2008、1-16

[学会発表] (計2件)

①京大人文研シンポジウム、大津留厚「非総力戦としての第一次世界大戦—収容所から見た「総力戦」」(2010年12月25日)

②2010年度西洋史研究会共通論題シンポジ

ウム、大津留厚「アウスグライヒー歴史的経
験としての連邦制？」(2010年11月21日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大津留 厚 (OTSURU ATSUSHI)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：10176943